

ルカ神学における神の裁きとメタノイアの関係についての考察

ールカ福音書 13 章 6－9 節の釈義的研究ー

木 原 桂 二

第一節 問題設定

ルカ文書において展開されるメタノイア（改心）の要求は、神による裁きの警告と結びついている。たとえばヨハネは差し迫る神の裁きの警告を発しつつ（ルカ 3:7-9 // マタイ 3:7-10 [Q]）、バプテスマを受けに来た群衆に向けて「メタノイアにふさわしい実を結べ（ποιήσατε οὖν καρποὺς ἁγίους τῆς μετανοίας）」（ルカ 3:8）と呼びかけた。しかしルカの場合、Q 資料に基づくこの表現をイエスの宣教活動に関連づけている点で特徴的である。

具体的には、ルカ 13:1-5 において「あなたがたもメタノイアしなければ、同じように滅びる」（3, 5 節）というイエスの発言が見られる。このようにバプテスマのヨハネの警告は、ルカの描くイエスにも継承されているのである。さらに、続く 6-9 節においては「実のならないいちじくの木の手え話」（ルカ特殊資料 [L]）が展開され、「実（καρπός）」を結ばないと切り倒される（裁かれる）という警告的内容が示される。

そこで、われわれは「実のならないいちじくの木の手え話」（ルカ 13:6-9）を釈義的に考察し、ルカの編集意図を明らかにしたい。果たしてルカは、Q 資料によって描かれるバプテスマのヨハネの警告をそのまま継承しているのだろうか。あるいはそれを発展させ、独自の神学を展開しようとしているのだろうか。本論文においてはルカ神学における神の裁きとメタノイアの関係性を明らかにし、「メタノイアにふさわしい実を結べ」という使信の意味を考察する。

第二節 釈義的考察（ルカ 13:6-9）

本節では「問題設定」において言及したように、「実のならないいちじくの木の手え話」（13:6-9）の編集史的考察により、ルカ神学における神の裁きとメタノイアの関係性を明らかにする。

1. 「実のならないいちじくの木の譬え話」(13:6-9)の文脈

具体的な釈義に入る前に、ルカ 13:6-9 の位置づけを確認することにしたい。まずルカ福音書全体の構成を確認すると、以下のように分けすることができる。

- A. 前史 (1:1-2:52)
- B. バプテスマのヨハネの活動とイエスの活動準備 (3:1-4:13)
- C. イエスのガリラヤ宣教 (4:14-9:50)
- D. イエスのエルサレムへの旅 (9:51-19:27)**
- E. エルサレムにおけるイエスの活動 (19:28-21:38)
- F. 過越しの食事とイエスの死 (22:1-23:56)
- G. イエスの復活と昇天 (24:1-53)

以上のように、ルカ 13:6-9 は「イエスのエルサレムへの旅」(9:51-19:27)の文脈に配置されていることが分かる。また、この同じ文脈の中には「終末時における神の裁き」に関するテキストが多く見られる。その箇所は以下の通りである。

- a. 改心しない町への警告 (10:13-16) ⁽¹⁾
- b. 裁きの時について——ニネベの人々と南の女王のエピソード (11:29-32) ⁽²⁾
- c. 人の子の到来と裁き (12:35-48) ⁽³⁾
- d. 改心(メタノイア)しない者は滅びる (13:1-5 [L])
- e. 実のならないいちじくの木の譬え話 (13:6-9)**
- f. 狭い戸口から入れ (13:22-30) ⁽⁴⁾
- g. エルサレムのための嘆き (13:31-35) ⁽⁵⁾
- h. 神の国と人の子の到来 (17:20-37) ⁽⁶⁾
- i. 裁判官の譬え話 (18:1-8 [L])
- j. ムナの譬え話 (19:11-27) ⁽⁷⁾

以上のように、「イエスのエルサレムへの旅」(9:51-19:27)の中には「終末時における神の裁き」に関するテキストが散りばめられている。「実のならないいちじくの木

(1) // マタイ 11:20-24 (Q)。

(2) // マタイ 12:38-42 (Q)。

(3) // マタイ 24:45-51 (Q)。

(4) // マタイ 7:13-14, 21-23 (Q)。

(5) // マタイ 23:37-39 (Q)。

(6) // マタイ 24:23-28, 37-41 (Q)。

(7) // マタイ 25:14-30 (Q)。

木の譬え話」(13:6-9) もその一つであるが、本論文においては、この箇所「神の裁きの警告」というモチーフに関するルカの特別な関心が示されているものと捉え、考察の対象としたい。

2. ルカ 13:6b-7a とマルコ 11:12-14, 20-24 (// マタイ 21:18-22) の関係

「実のならないいちじくの木の譬え話」(ルカ 13:6-9) は、「実のならないいちじくの木」の取扱いをめぐる内容であるという点で、マルコ 11:12-14, 20-24 との類似点を指摘できる。ただし両テキストには重要な相違点も見られるので、ルカがマルコのテキストをそのまま利用していると見なすことはできない。それゆえ本項ではモチーフの類似点を手がかりに、両箇所の関係について考察することにする。

両ペリコーペとも物語の進行上、「いちじくの木 (συκή)」が重要な役割を与えられている点で共通している。さらに、そのいちじくの木の実⁽⁸⁾を探しに来たが見つからなかった (οὐδὲν εὑρεν [マルコ 11:13]、οὐχ εὑρεν / οὐχ εὕρισκω [ルカ 13:6, 7]) という展開も酷似している。このように両ペリコーペは、実を結ばせるべきいちじくの木が、実を探しに来た登場人物の期待を裏切るという内容を示しているのである。

しかしマルコは物語、ルカは譬え話という文学類型上の違いがある。また、実を求める人物に関しても、前者はイエス、後者はぶどう園の主人 (= 神) がその役割を演じているという違いもある。さらに大きな問題として、ルカが物語の意義づけ自体を変えてしまっている点を指摘すべきであろう。

ルカは編集作業を通して、マルコ 11:12-14, 20-24 の物語を本来あるべき位置から取り除いてしまっている。マルコによる物語の展開を踏襲するならば、「イエスがいちじくの木を枯らす物語」は「イエスが神殿の商人を追い出す物語」(ルカ 19:45-48) の前後に挟み込むように配置されていなければならない。しかしルカは、いちじくの木の実の問題を「イエスのエルサレムへの旅」(9:51-19:27) の途中に配置することにより、マルコの物語設定を変更しているのである。つまり、マルコは「実のならないいちじくの木」を「神殿の問題」を取り扱うものとして描いているのだが⁽⁹⁾、ルカはこれをイエスの宣教活動の中に位置づけるだけでなく、終末の裁きとの関係で描こうとしているのである。その具体的な内容については、さらに考察を推し進めたい。

(8) マルコは「実 (καρπός)」という語ではなく「何か (τίς)」としているが、文脈上「何か」が「実」を指しているのは明らかであろう。

(9) Cf. J. Marcus, *Mark 8-10*, AB27A, New Haven: Yale University Press, 2009, pp. 788f.; J. Gnllka, *Das Evangelium nach Markus (Mk 8, 27-16, 20)*, EKKII/2, Zürich: Neukirchen-Vluyn, 1979, p. 123; E・シュヴァイツァー『マルコによる福音書』(高橋三郎訳) ATD・NTD 聖書注解刊行会、1976年、319頁; L・ウィリアムソン『マルコによる福音書』(山口雅弘訳) 日本基督教団出版局、1987年、330-332頁。

3. ルカ 13:7b とルカ 3:7-9 (// マタイ 3:7-10 [Q]) の関係

ルカ 13:7b によれば、実を結ばなかったいちじくの木は伐採の危機に直面している⁽¹⁰⁾。ぶどう園の主人は、その木を「切り倒せ (ἐκκοψον [οὖν] αὐτήν)」と命令しているからである。果たしてルカは、このモチーフをどこから得ているのだろうか。

前項において考察したように、本ペリコーペの背後にマルコ 11:12-14, 20-24 があることを推測できるが、しかし、いちじくの木に対する処置の仕方はマルコと異なっている。マルコの場合、実のならないいちじくの木に不満を覚えたイエスがそれを呪って枯らすのであるが (ἡ συκὴ ἣν κατηράσω ἐξήρανται [マルコ 11:21])、ルカの場合には伐採が命じられるだけで、最終的ないちじくの木の手扱いは明らかとされていない。

おそらくルカは、イエスが実のならないいちじくの木を枯らしたとするマルコの結論を拒否したかったのだろう。言い換えれば、彼は実を結ぶことを要求し続けるイエスを描きたかったのである。そのためにルカは Q 資料 (ルカ 3:7-9 // マタイ 3:7-10) を参照して、イエスの譬え話を構成したと考えられる⁽¹¹⁾。このことは、ルカ 13:7 の「切り倒せ (ἐκκοψον)」と、ルカ 3:9 の「切り倒される (ἐκκόπτεται)」が語のレベルで共通していることから確認できる。またそれとの関連で、実のならない木は切り倒されても仕方がないとの認識がルカ 13:9 に見られる。これらの編集作業を通してルカは、イエスの行為をバプテスマのヨハネの使信に関連させ、「それゆえメタノイアにふさわしい実を結べ (ποιήσατε οὖν καρπὸς ἀγίους τῆς μετανοίας)」(ルカ 3:8) という要請を生かすように構成したのである (行伝 26:20 参照)。

4. ルカ 13:8a における預言者的モチーフ (アモス 7:3, 6 [LXX]) の導入

これまで考察したように、ルカはマルコと Q 資料のテキストを編集し、「人は神からメタノイアの実を要求されているがゆえに、実を結ぶ生き方をしない者は滅びの危機の中にある」との認識を示そうとしている⁽¹²⁾。その際ルカは、実のならないいちじくの木をイエスの呪いによって枯らすというマルコの結論を採用せず、いちじくの木を救済する方向で描き直そうとした。そのことはルカ 13:8 が示す譬え話の園丁の

(10) エレミヤ 8:13 に、これと類似するモチーフが見られる。cf. W.Eckey, *Das Lukasevangelium: Unter Berücksichtigung seiner Parallelen*, Teilband 2: Lk11,1-24,53, Neukirchen-Vluyn, 2006, p.620.

(11) ルカ 13:6-9 と、ルカ 3:7-9 (// マタイ 3:7-10 [Q]) のモチーフの類似点については、K・H・レングストルフ『ルカによる福音書』(泉治典／渋谷浩訳) ATD・NTD 聖書注解刊行会、1976 年、358 頁；R.C.Tannehill, *The Narrative Unity of Luke-Acts. A Literary Interpretation Vol.1: The Gospel According to Luke*, Philadelphia: Fortress Press, 1986, pp.144f. 他多数の研究者が指摘している。

(12) J.Fitzmyer は、実のならないいちじくの木の状態を怠惰の罪と見なし、差し迫る危機の中で悔改めが要求されていると理解する。また G.D.Nave も、悔改めを滅びから逃れる手段と見なしている。しかしルカは、Q 資料のモチーフをそのまま継承しているわけではないし、滅びから逃れるという消極的な動機を強調しているわけでもない。その根拠については後述する。cf. J.A.Fitzmyer, *Gospel according to Luke X-XIV*, AB28A, New York: Doubleday, 1985, pp. 1004-1006; G.D.Nave, *The Role and Function of Repentance in Luke-Acts*, Leiden: Society of Biblical Literature, 2002, p.179.

発言によって確認できよう。

園丁は、いちじくの木の新伐採を命じる主人に対して「ご主人さま、今年もまた、その木をそのままにしておいて下さい (κύριε, ἄφες αὐτήν καὶ τοῦτο τὸ ἔτος)」(ルカ 13:8a) と提案している。この言葉の資料の由来については後述するが、ここから譬え話の独特な意外性が発揮されている。一般的に考えるなら、いちじくの木は三年間も実を結ばなかったのであるから、その木を伐採するという主人の判断は妥当なものであり、特に冷酷なものであるとは言えない。ところが園丁は、主人の僕という低い立場を顧みず主人に食い下がっているのであるから、ここに勇気ある行動が示されていると判断できるのである⁽¹³⁾。

果たしてルカは、このモチーフをどこから入手したのであろうか。この問題について F.Bovon は、列王記下 4:27 (LXX) とダニエル書 4:15 (LXX) が、ルカ 13:8a の基になった資料であると推測するが⁽¹⁴⁾、いずれの箇所も ἄφες αὐτήν という語の使用についての類似点が見出せるだけであり、内容的な関連性はないと言える。

そこでわれわれは、ルカがアモス書 7:3, 6 (LXX) を参照した可能性を指摘したい⁽¹⁵⁾。主人に対する「主よ (木を) そのままにしてください (κύριε, ἄφες)」という園丁による懇願の言葉が、「主よ (裁きを) 思い直してください (μετανόησον κύριε)」というアモス 7:3, 6 (LXX)⁽¹⁶⁾ に由来するものと考えられるのである。もっとも、これら二つの表現において使用されている語は異なっている。しかしそれでも、木の伐採に象徴される「神の裁き」の延期を懇願するという内容的な類似による関連性は認められよう。

アモス 7:3, 6 (LXX)	μετανόησον κύριε ἐπὶ τούτῳ
ルカ 13:8a	κύριε, ἄφες αὐτήν

それでは、なぜルカは μετανόησον ではなく ἄφες を用いたのだろうか。まずは単純に、

(13) この点について、物語の意外な展開に注目する研究者が多い。たとえば F.Bovon は、身分の低い園丁が強い立場にある主人に対して意義を申し立てるのは予期せぬことであると述べている。このような、物語の意外性と恩恵的側面に注目する解釈には妥当性があると判断したい。cf. F.Bovon, *Das Evangelium nach Lukas*, EKK III /2, Zürich: Neukirchen-Vluyn, 1996, pp.381ff.; J.B.Green, *The Gospel of Luke*, Grand Rapids: Eerdmans, 1997, pp.515f.; H.J.Sellner, *Das Heil Gottes: Studien zur Soteriologie des lukanischen Doppelwerks*, Berlin: Walter de Gruyter, 2007, pp.147f.

(14) Cf. Bovon, op.cit., p.382.

(15) アモス書 7:3, 6 (LXX) に類似する表現が、ヨエル 2:13-14; ヨナ 3:9, 10b, 4:2; エレミヤ 18:8, 10 (いずれも LXX) に見られる。また LXX におけるメタノイアの用例分析については、拙論「メタノイアの概念に関する考察 ―ルカ神学におけるメタノイア理解の予備的考察―」『神学研究』、関西学院大学神学研究会、第 56 号、4-7 頁、2009 年を参照されたい。

(16) アモス 7:3, 6 の MT は「ヤハウェはこのことを思い直した (יְהוָה יִחַן עַל-זֵאת)」となっており、LXX とは表現が異なる。cf. K.Elliger / W.Rudolph (eds.), *Biblia Hebraica Stuttgartensia* (BHS), Vierte verbesserte Auflage, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1990, p.1024.

物語の進行上の理由が考えられよう。園丁の懇願の仕方は「木をそのままにしてください」であるから、ἄφεσιςを用いるのが適切なのである。しかし、そのことで神学的意味が失われたとは考えられない。なぜなら「メタノイア (μετάνοια)」と「赦し (ἄφεσις)」は、ルカ文書の中で密接な関係を保っているからである。このことを確認するために、行伝 5:31 のギリシア語原文と試訳を以下に示したい。

行伝 5:31 τοῦτον ὁ θεὸς ἀρχηγὸν καὶ σωτῆρα ὑψώσεν τῇ δεξιᾷ αὐτοῦ [τοῦ] δοῦναι μετάνοιαν τῷ Ἰσραὴλ καὶ ἄφεσιν ἁμαρτιῶν.

イスラエルにメタノイアと罪の赦しを与えるために、神は彼（イエス）を指導者、また救済者として、自らの右手に引き上げたのである。

以上の用例が示すように、メタノイアとアフェシスはイスラエルに与えられる (δοῦναι) 神からの恩恵として表現されている⁽¹⁷⁾。また、二つの表現は καὶ によって結ばれているので、メタノイアとアフェシスは同列に扱われていると捉えられる。それゆえルカ 13:8a の ἄφεσις も、ただ単に木の放置を願う表現ではなく、「罪の赦し」に結びつけられた神学的表現であり、「神による裁きの思い直し」(アモス 7:3, 6 [LXX]) への期待を表すものと考えられよう。

そして、もしこの捉え方が妥当であるならば、ルカ神学における「終末の遅延」の意味に関する新たな視点が得られる。H・コンツェルマンの『時の中心』によれば、ルカは「終末の遅延」の問題を解決する必要に迫られて独自の歴史観に基づく編集作業を行ったとされる。具体的には、「イスラエルの時」「イエスの時（時の中心）」「教会の時（聖霊の時）」という三つの時代区分によって物語が構成されたと想定されているのである⁽¹⁸⁾。この仮説については、部分的に様々な批判が提起されているが、大筋においては現在でも認められている。

しかしそれでもコンツェルマンの説は、「終末の遅延」という現象の背後にある神学を明らかにしていないという点で不十分に思われる⁽¹⁹⁾。これまで述べてきたよう

(17) 『口語訳』『新共同訳』は δοῦναι μετάνοιαν を「悔い改めさせ」と使役的に訳している。他方『岩波版新約聖書』は「悔い改め……を与えるために」と訳しているが、このように神の恩恵的側面を生かす訳し方をするならば、μετάνοια を人間の「悔い改め」の意味に解釈するのは問題であろう。H・コンツェルマンによれば、行伝 5:31 (11:18 参照) の δοῦναι μετάνοιαν は元来救いの賜物を指す表現であった。しかし彼は、ルカがそのような意味で解釈しているとは見なさず、悔い改めの機会を与える意味でこの表現を用いていると説明している。H・コンツェルマン『時の中心—ルカ神学の研究』（田川建三訳）新教出版社、1965 年 (H.Conzelmann, *Die Mitte der Zeit: Studien zur Theologie des Lukas*, 4. Aufl., Tübingen, 1962)、170-171 頁参照。

(18) H・コンツェルマン、同上、251-253 頁参照。

(19) 「終末の裁きの延期」という重大なモチーフを示すルカ 13:6-9 は、コンツェルマンの『時の中心』に取り上げられていない。しかしこの譬え話は、ルカ神学の歴史観と救済史理解を考察する上で極めて重要である。

に、ルカは神の裁きの延期を願う預言者のモチーフを意図的に導入することで、終末の延期が単なる時間の延長ではないことを示している。言い換えれば「終末の遅延」は、預言者の祈りに対する神の応答行為としての忍耐と赦しの出来事として捉えられる。それゆえコンツェルマンが仮説として提示するルカの歴史的枠組みに加えて、それを構成しようとするルカの神学的編集意図を明らかにする必要があると言わねばならない。

そこで終末の遅延を神の恩恵と見なす思想が、ルカ文書の他の箇所にも認められるかどうか問題となる。この点に関して、Bovon はルカ 13:8a の延期された「年」が、ルカ 4:19 の「主の恵みの年を告げ知らせるため (κηρύξαι ἐνιαυτὸν κυρίου δεκτόν)」という言葉に関連しているとする A.Jülicher の説を紹介している⁽²⁰⁾。確かに、想定されている恵みの期間が一年であるという点や、「主の恵みの年」を告げるのがイエスであるという物語上の設定、さらにこの節がルカ独自のものであるという三つの根拠から説得力を感じさせられる。やはり、ルカが「神から与えられる恵みの一年」という神学的理解を持っていることは間違いないと言えよう。

5. ルカ 13:8b-9 におけるルカの結末

「私がその（木の）周りを掘って、肥料を与えてみましょう (σκάψω περὶ αὐτὴν καὶ βάλλω κόπρια)」(ルカ 13:8b) という園丁の提案によって、この譬え話は「実のならない木の伐採の危機的状況」から「実のならない木に対する恩恵的措置」へと大きく方向転換をすることになる。もっとも、それで危機的状況が完全に失われたわけではない。実を結ぶようになることへの期待感はあるものの、恩恵的措置が効を奏さなかった場合には伐採の危機を免れることはできないとされているからである（9 節）。そのことは譬え話の登場人物である園丁自身が認めている。しかしそれでも強調点は、園丁による恩恵的行為に注がれていると思われる。9 節の言葉は、恩恵的行為を踏みにじってはならないという意味での警告を示すものだからである。

ところで、ここに描かれている発想を得るために、ルカは何を参照したのだろうか。ユダヤ／キリスト教文献には、これと類似するモチーフを見出すことはできない。しかし聖書外資料として J.B.Green⁽²¹⁾ と W.Eckey⁽²²⁾ が、アヒカル物語のシリア語訳、アラビア語訳、アルメニア語訳の各版に「実のならないいいちじくの木の譬え」と

(20) Bovon, op.cit., p.383; cf. A.Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1976, p.437.

(21) Green, op.cit., p.515.

(22) Eckey, op.cit., p.621.

類似するエピソードがあることを指摘している⁽²³⁾。ただし物語の結論はルカによる譬え話と異なり、木に対する恩恵的措置はとられない⁽²⁴⁾。それゆえルカ 13:8b に関しては、ルカがアヒカル物語を参照して改変したか、ルカの創作であると考えられる⁽²⁵⁾。だがいずれにせよ、ルカが実のならないいちじくの木に対する恩恵的措置を描こうとしたことに変わりはない。

さて、このような形で要求される「実 (καρπός)」のモチーフは何を意味しているのだろうか。結論を述べるなら、それは改心 (メタノイア) した者による行いの成果である。具体的な内容は、バプテスマのヨハネから実を結ぶことを要求された群衆が (ルカ 3:8) 他者と分かち合うように指示を受け (3:10-11)、徴税人や兵士が金銭的な搾取をしないように訓戒を受けるエピソード (3:12-14) に示されている。さらに、ルカは使徒行伝においても「メタノイアにふさわしい業をするように (ἀξια τῆς μετανοίας ἔργα πράσσοντας)」(26:20) という表現を「メタノイアにふさわしい実を結べ (ποιήσατε οὖν καρποὺς ἀξιούς τῆς μετανοίας)」(ルカ 3:8) に対応させ、この使信を使徒時代の教会にまで継承させている。このことから「実を結ばせること＝メタノイアにふさわしい行い (業) をすること」は、ルカ神学の主要なテーマであるという帰結がもたらされる。

そこで「メタノイアにふさわしい行い (業)」を実行するための動機が問題となる。ルカの描き方によれば、単に神の裁きを逃れることが目的ではない。なぜなら「実のならないいちじくの木」の譬え話には、木のために穴を掘って肥料を与える園丁が登場するからである。つまり、実を結ばせるための具体的な支援が示されているのである。Bovon や Green が指摘するように、本来、実を結ばなかった経歴を持つ木に保護の手を入れるのは無駄な行為と見なされてもおかしくない。それゆえ、園丁の行動は驚くべきものと言える⁽²⁶⁾。しかしルカは、この働きがあるからこそ、実を結ばせる可能性が生じると主張するのである。

果たして、このような驚くべき恩恵的行為を実行する園丁は誰を指し示している

(23) Green の指摘はシリア語版についてのみ。

(24) J・エレミアス『イエスの譬え』(善野碩之助訳) 新教出版社、1969 年、190 頁による、このエピソードの紹介と翻訳は次の通りである。「アヒカル (紀元前五世紀以前であることは確かだ) の物語中にこう記されている。《わが子よ、お前は、水辺に立っていたにもかかわらず実を生じなかった木のようなのだ。そしてその持主は、その木を切るようにすすめられていた。そこで木は持主に言った。わたしを植えかえてください。それでもなお、わたしが実を生じなかったら、わたしを切り倒してくださいと。しかしその持主は木に言った。お前は水辺に立っていた時実を生じなかった、他の場所へ移されてどうして実を生じるだろうかと》」。

(25) J・エレミアス (同上) は、さまざまな本文で流布されていた民話をイエスが用いて異なる結論を付与した可能性を示唆している。しかしこの譬え話には、かなり手の込んだ編集が加えられているので、ここに史的イエスの言葉の反映があると見なすのは難しい。

(26) J・エレミアス、前掲書、189 頁参照。cf. Bovon, op.cit., pp381ff.; Green, op.cit., pp.515.f.

のだろうか。おそらくその答えはイエスであろう⁽²⁷⁾。なぜならルカ福音書の中には、イエスが人々にメタノイアの行為を起こさせる物語が見られるからである。たとえば「ペテロの召命記事」(5:1-11)の中で、イエスの話を聴いたペテロがイエスの助言を受け、漁師である自分でも捕獲できなかった魚が大漁に獲れるという経験をする(1-7節)。その結果ペテロは、自分の罪深さを自覚することになった(8節)。ところがイエスはそのようなペテロを宣教者として遣わすと宣言している(10節)。また「罪の女の物語」(7:36-50)においては、ファリサイ派によって罪人扱いされていた女性が(39節)、イエスを歓迎する振舞いを見せたとされる(44-46節)。さらに「徴税人ザアカイの物語」(19:1-10)においても、罪人扱いされていたザアカイの客となったイエスの影響によって、ザアカイは生まれ変わった生き方をするように決心をする(8節)。

これらのルカに特徴的な物語が示すように、イエスの存在と働きは、出会った人の再出発(メタノイア)を促すものなのである。つまりイエスの宣教活動そのものが、実を結ばせるために穴を掘って肥料を与える行為なのである。マルコ 11:12-14, 20-24 や Q 資料(ルカ 3:7-9 // マタイ 3:7-10)に見られなかったルカ独自の信仰理解が、ここに反映していると言えるであろう。

ただしそれでもルカは、単に恩恵的な側面のみを強調しているわけではない。実を結ばない木には、やがて伐採される時が来ると警告しているからである(ルカ 13:9)。おそらくルカはその当時の読者に対して、神から猶予を与えられた恩恵の時代を逃さないよう注意を促し続けたかったのだろう。その上でルカは、神の恩恵の時代の中でイエスと出会えば再出発が可能になるという主張を込めて譬え話を構成したのである。

《参考資料》ルカ 13:6-9 の資料問題に関する分析結果

- 13:6a ルカによる編集句
- 13:6b-7a マルコ 11:12-14, 20-24 (// マタイ 21:18-22) のモチーフの改変
- 13:7b ルカ 3:7-9 (// マタイ 3:7-10 [Q]) のモチーフからの転用
- 13:8a アモス 7:3, 6 (LXX) のモチーフの導入
- 13:8b ルカによる創作(アヒカル物語を転用?)
- 13:9 ルカによる譬え話の結論

(27) K・H・レングストルフ、前掲書、358-359 頁も、実のならないいちじくの木の譬え話が証する内容と、救い主イエスの活動との関連性を指摘している。エレミアス(前掲書、190 頁)もその可能性を指摘しており、参照箇所としてルカ 22:31 以下を挙げている。

第三節 結論

ルカ 13:6-9 は「メタノイアにふさわしい実を結べ (ποιήσατε οὖν καρπούς ἀξιούς τῆς μετανοίας)」(ルカ 3:8; 行伝 26:20 参照) というルカの中心的なテーマを考察する上で欠かすことのできない重要な箇所である。ルカは「実を結ばないいちじくの木の話」を構成するに際し、マルコ福音書、Q 資料、アモス書 (LXX)、さらには自身の表現を取り混ぜながら、このテーマに取り組んだ。

まず、ルカは Q 資料のバプテスマのヨハネによる神の裁きの警告とメタノイアの呼びかけを尊重している (ルカ 3:7-9 [// マタイ 3:7-10])。その上で、神が「実」を探し求める存在であるということをマルコ 11:12-14 のモチーフを利用して付け加えた。そして、もしも実を結ぶことがなければ切り倒されても (裁きを受けても) 仕方がないとの主張を展開する (ルカ 13:9)。しかしルカは、イエスが実のならないいちじくの木を呪って枯らすというマルコ (11:12-14, 20-24) の結論は受容しなかった。反対に、実のならないいちじくの木を伐採を一年延期するよう神 (譬え話の「主人」) に懇願するという恩恵的なモチーフを導入したのである (ルカ 3:8)。

おそらくルカは、アモス 7:3, 6 (LXX) の表現にヒントを得て、神に裁きの延期を懇願するというモチーフを譬え話に取り入れた (ルカ 13:8a)。しかし譬え話の「園丁」は預言者ではなくイエスを指し、メタノイアの実を結ばない者たちに対する神の裁きの猶予を願い求める存在として描かれている。この編集作業を通して、ルカ文書における「終末の遅延」の理由が神学的に想定されていると考えられる。

さらにルカは、メタノイアの実を結ばない者たちに対して恩恵的な関わりをする存在としてイエスを描いている (ルカ 13:8b)。譬え話の中の園丁は、実を結ばないいちじくの木のために穴を掘って肥料を与えることを主人に進言しているが、そのような提案は決して当たり前のことではない。効率を無視したこの提案は、一般常識に反するものだからである。しかしルカは、このようなイエスの恩恵的な行為こそが人々をメタノイアに導くと語っているのである。

その具体的な成果は、ルカ福音書の中に数多く記されている。代表的なものとして、「ペテロの召命記事 (5:1-11)」「罪の女の物語 (7:36-50)」「徴税人ザアカイの物語 (19:1-10)」等を挙げることができよう。イエスは出会った人々の罪を指摘したり、改心を強要したりはしなかった。しかしイエスの言葉と行為は、罪を自覚する人々の心にメタノイアをもたらし、新しい人生の出発を促すのである。

(28) Cf. R.H.Stein, *Luke*, NAC24, Nashville: Broadman Press, 1992, p.371.

(29) J・エレミアス (前掲書、190 頁) は、「もしこの悔改めの時が空しく経過するならば、神の忍耐も尽きてしまう。神によって保証されたこの悔改めの猶予期間が過ぎ去った時には、どんな人間の力もその時を引き延ばすことはできない」と述べている。

しかし一方でルカは、イエスの宣教活動を拒否する存在があるという問題も暗示している（13:9）。イエスによる救済行為が行われても、神による裁きの危機が完全に失われるわけではない⁽²⁸⁾。救済行為を与えられた人間が、それでも神からの恩恵を拒否し続けるなら、その結末は神の手に委ねられている⁽²⁹⁾。こうしてルカは譬え話の結末を留保することにより、読者の決断に期待しているのであろう。